

七、イエスのたとえ——抽象性から具体性へ（問いを変える）

ルカによる福音書第一〇章二五—三七節

イエスがかつて語られた物語の中で良きサマリヤ人のたとえ以上に知られている話はない。しかしながら、まさに一般的に知られていることが問題を生み出す。あまりにもよく知っていること、見落としてしまいがちなことがあるのである。日曜礼拝の聖句が、「ある人がエルサレムからエリコに下って行く途中……」という始まり方をすれば、うわの空で聞いていてもかまわなくなる。次がどうなっているか知っているからである。

第三世界の友人たちは、月並みな聖書の読み方から私たちを揺さぶり出す手助けをしてくれる。本章の物語に対する彼らの読み方も例外ではない。私たちはこの物語を、ある問いに対する答として読んでいる。そして私たちに示されていることは、話の展開の中で問いが変わっていること

である。問いが変われば、答も変わってくるのである。

物語の中では、隣人性に関して問いが変わっているのであるが、そのことは、隣人とは何を意味しているかについて私たちの答も変わらなければならないことを示している。

この物語はイエスのたとえ話の中で最も有名であるがゆえに、徹底して批判的となってきた。実際、たとえの文学的様式全体が近年再検討されてきているように、このたとえ話もしばしば数節ずつに寸断されて、前後関係の文脈から抜き出されたりしてきた。しかしながら私たちの議論のためには、記事（ルカ一〇・二五―三七）の一貫性を前提し、たとえ話それ自体だけでなく、このたとえ話を生み出した状況およびそれによって生み出された新しい状況についても取り扱うことにしよう。

聖書のテキスト ルカによる福音書第一〇章二五―三七節

するとそこへ、ある律法学者が現れ、イエスを試みようとして言った、「先生、何をしたら永遠の生命が受けられましょうか」。彼に言われた、「律法にはなんと書いてあるか。あなたはどう読むか」。彼は答えて言った「心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつ

くして、主なるあなたの神を愛せよ。また、『自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ』とあります。彼に言われた、「あなたの答は正しい。そのとおり行いなさい。そうすれば、いのちが得られる」。

すると彼は自分の立場を弁護しようと思って、イエスに言った、「では、わたしの隣り人とはだれのことですか」。イエスが答えて言われた、「ある人がエルサレムからエリコに下って行く途中、強盗どもが彼を襲い、その着物をはぎ取り、傷を負わせ、半殺しにしたまま、逃げ去った。するとたまたま、ひとりの祭司がその道を下ってきたが、この人を見ると、向こう側を通って行った。同様に、レビ人もこの場所にさしかかってきたが、彼を見ると向こう側を通って行った。ところが、あるサマリヤ人が旅をしてこの人のところを通りかかり、彼を見て気の毒に思い、近寄ってきてその傷にオリブ油とぶどう酒とを注いでほうたいをしてやり、自分の家畜に乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。翌日、デナリ二つを取り出して宿屋の主人に手渡し、『この人を見てやってください。費用がよけいにかかったら、帰りがけに、わたしが支払います』と言った。この三人のうち、だれが強盗に襲われた人の隣り人になったと思うか」。彼が言った、「その人に慈悲深い行いをした人です」。そこでイエスは言われた、「あなたも行つて同じようにしなさい」。

場面はイエスの伝道活動の中でも御馴染みのところである。頭のいい質問者がイエスを尻にか
けようとする。一流ロースクールの法学博士号を持っていて、法学雑誌の編集もしている弁護士
で、人文の分野での博士号も併せて持っている男が質問を携えてやって来る。「何をしたら永遠
の生命が受けられましょうか」。イエスは巧みな教育的方法で質問を彼に投げ返し、永遠の生命
のためには神を愛することと隣人を愛することが必要だという応答を引き出している。イエスは
彼にそのように行ないなさいと告げる。なぜならば彼はすでに何をなすべきかを知っているから
である。しかし弁護士はそう簡単に納得する気はなく、再び論争を仕掛ける。彼にはもう一つ質
問があった。「わたしの隣り人とはだれのことですか」。

この質問をすることによって、弁護士は議論を安全地帯に引き戻している。議論のためには、
隣人となるかどうかは必要ではなく、隣人の定義をすることだけが必要なのである。学問的探求
だけが展開されることになったわけで、弁護士は自分自身の生活のあり方が綿密に吟味されるこ
とを免れ、後は言葉の上のやりとりをうまくやってのければよいことになったのである。弁護士
が秀でているのはこのような領域においてである。

弁護士が心の中で考えていたことを探ってみると、議論を実りあるものとするために、おそら
く「隣人の概念」といった主題でのシンポジウムを組織することで、真に包括的な定義に到達す

ることができるだろうなどと考えていたに違いない。実際、弁護士はそんな企画に金を出すように説得できる可能性のある小さな財団の理事をしていた。また次のようなテーマの論文集を出すこともできよう。「ストア学派の隣人概念」、「最近の中東の小説における隣人性」（非常に短いもの）、「ギリシャとの通商関係改善のための隣人性に関する文化的背景」、「隣人性——女性の視点」（望まれる客観性を持たせるために男性が執筆者であること）。そして一番最後には、地方の博士論文の市場にもあたって、「奴隷階級から見た隣人性——満足度／不満足度に関する現代的データ獲得を目的として、アレキサンドリア奴隷市場で行なわれたインタビュー報告」といったものも入れることにしよう。（弁護士はさらに考えを進めて）その論文集はおそらく自分が編集して出版することができようし、執筆者たちは隣人を得るよりもむしろ大学での職を得るためにその本を自分の業績リストに加えることができるであろうと考えた。

このような想像は（残念なことであるが決して私の勝手な空想ではない）、行動に移すことを避けるために私たちがいかに巧みに思想を用いているかを示している。何も今に始まったことではない。

イエスはそれを見事に断ち切っている。学問的ゲームを拒否するのである。彼は一つの物語を語る。

学のある博士をやり込めるには確かにそれ以上によい方法はなかった。「物語だって？ 刺激

溢れる知的な議論をするつもりかと思っていたら、物語を話すというのか」。弁護士は話を聞かなければならなくなってしまう。何と言っても問いを発したのは弁護士の方であり、もし彼がイエスの答を知りたければ、物語からどんな定義が引き出されてくるか見てみなければならぬ。

(イエスは話し始めた。) 不法入国した一人の労働者が小高いノッブ・ヒルから漁師町に向かっていた。その途中、麻薬中毒の一〇代の青年の団が、ヤク欲しさから彼を殴り倒し、財布を奪い、半殺しにして道路脇に置き去りにしていった。さて偶然にも一人の長老派牧師が同じ道路を通りかかったが、この人を見ると信号のところで向こう側に曲がって行ってしまった。教会役員会の時間にとくに遅れていたからである。次にサンフランシスコ社会事業局の副局長がこの場所にさしかかったが、彼を見ると向こう側を通って行った。昼食祈禱会で「青少年犯罪防止対策」についてスピーチするために自分の考えをまとめておく必要があったからである。その次にソ連大使館の職員が通りかかり、男が倒れている場所に来ると、気の毒に思い、車を止めて運転席のグローブ・ボックスから救急箱を取り出し、傷口に包帯を巻いてあげようとした。それから血まみれになりながら、彼を後部座席に乗せ「慈善」病院に運んだ。被害者は健康保険に加入していなかったので、病院は経済的に確かな保証人なしには収容しようとしなかった。若い

ロシア人女性は自分の財布を取り出し、受付に五〇ドル札を二枚渡して言った。「この人を見てやって下さい。もし足りないようでしたら、私のVISAクレジット・カードを置いて行きます。差額は私が明日戻ってきた時にお支払いします」。

私たちはこの物語を二つの観点から見てみよう。最初に弁護士の問いに関して、その次にイエスの新しい問いに関して。

1 この物語の「良きサマリヤ人」という伝統的表題には、驚くほどの価値があることを確認しておきたい。イエスの時代には誰も単純に、「良い」という形容詞を「サマリヤ人」という名詞と並置することはできなかった。なぜならば「良きサマリヤ人」という組合せになってしまからであり、イエスの聴衆にとって、それはおよそ考えられないことであった。というのはサマリヤ人ははつきりと悪であり、敵であったからである。これと同様に私たちの社会の多くの人々は「良い」という形容詞と「ロシア人」という名詞を並べて考えることができない。なぜならば「良きロシア人」という組合せになってしまからであり、それはおよそ考えられないことである。というのはロシア人ははつきりと悪であり、敵だからである。邪悪な無神論的共産主義的ロシア人が「憐れみ」（これはアメリカ人の特質であって、ロシア人の特質ではないと私たちは考

えている)の気持ちによって動かされるということは考えられないことである。そして邪悪な無神論的共産主義的ロシア人が、プロテスタントの牧師や社会事業局の責任者よりも道徳的に優れた者として登場するというのは、共産主義者のプロパガンダに他ならないというわけである。

もしロシア人のたとえが驚くほどのことでないようならば、他の組合せを考えてみることもできる。「良き同性愛者」「良きサンディニスタ」「良き労働組合指導者」「良き資本家」など、そう呼んだら誰でも一番怒りそうに思える組合せをちょっと選んでみるとよい。ひねりの利いたイエスの言葉を聞いて聴衆が抱いた怒りを再現することができるであらう。

私たちが弁護士 of 質問の線に添って隣人の定義を求めるとしたら、物語はかなり明確な解答を出してくれる。隣人とは単に身近な友人であるとか自分と同じ社会の一員であるのではない。隣人とは、誰であれ、困っている人のことである。道路脇に倒れていた人を決して誰とも特定していないのは、語り手としてのイエスの技量を示す一例である。倒れている人はただ「ある人」であり、誰であっても(男であっても女であっても)かまわない。身元も社会保障番号も不明で、仕事を探したり生活保護を申請したりする時に必要な三人の保証人もいないのかも知れない。合衆国においては、「不法入国の労働者」が「ある人」に最も近い存在である。私たちにとって不法入国の労働者は名前もなく、(もっとひどいことには)社会保障番号もなく、おそらく滞在す

る権利すらない。例えば、もしその「ある人」がエルサルバドルから来ているのであれば、政府の抑圧に反対して声を挙げたがために軍が彼を暗殺しようとして亡命してきているのかも知れない。しかしそうだとすると、身を隠している必要がある。なぜならば合衆国入国管理局が居所をつきとめて逮捕すれば、おそらく明確に規定された政策に従って、すぐ乗れる飛行機でエルサルバドルに送還され、そして銃殺されることになるからである。政府の隣人性なんてそんなものである。

この物語を読めば、隣人とは私が道端で出会う誰であつてもよいことになる。あるいはグスタボ・グティエレスがこのたとえ話の読み方について述べているように、隣人とは「私に助けを求めてくる人」のことであり、私が援助すべき人のことである。

さてこのような結論はかなり高い倫理性に到達していることを示しており、この物語は二千年間に及んで人々に憐れみを持つて振る舞うようにと奨励してきている。しかしグティエレスその他の第三世界の人々が指摘していることであるが、物語はそれ以上のことを告げている。なぜならば、もし隣人性についての私たちの理解がこれですべてでたとしたら、私たちの世界に変革の必要はなく、基本的にこのまま存続していつてよいことになってしまふからである。そのような隣人観では、従来の域を越える呼びかけとはならない。隣人として見る必要があるのは、私たちが

通っている道端にいる人々だけのことになってしまふからである。グティエレスはこの点を強調して、最も厳しい口調で、「すべての社会的改良主義はベランダから外に出て行かない『愛』である」と述べている (*The Power of the Poor in History*, p. 44)。

2 そこでイエスと弁護士のやりとりに戻ろう。すでに見てきたように弁護士の抽象的な質問に対して、イエスは物語を語り、その後で弁護士に質問を返している。しかしそれは全く異なった質問であつた。彼は祭司とレビ人とサマリヤ人に言及しながら尋ねる。「この三人のうち、だれが強盗に襲われた人の隣り人になつたと思うか」(ルカ一〇・三六)。弁護士の質問は抽象的で定義を求めるものであつたが、イエスの質問は具体的に行動を求めるものである。そしてイエスの質問の観点からすると、隣人とは誰であるのかを決定するのは道端に倒れている人の方ではなく、隣人としての行ないをした良きサマリヤ人の方である。隣人とは困っている人の方であるよりも、むしろサマリヤ人の方なのである。

エルネスト・カルデナルとソレンチナーメの村人たちは、ルカによる福音書の記事が日曜礼拝の聖句であつた時、同様の結論に至っているが、決して簡単にその結論に至つたのではなかつた。カルデナルはまず友人たちに物語を思い起こさせている。

7. イエスのたとえ——抽象性から具体性へ

「このたとえは、サマリヤ人が隣人を愛した人であり、そしてたとえの最後でイエスが問うていることは、道を通って行った三人のうち誰が負傷していた人の隣人であったかということであると一般的には考えられています」。

一人が答える——「宗教家ではないサマリヤ人が隣人でした」。

「負傷していた人は隣人じゃなかったのですか」「先入観はなかなか消え去らない」。

「負傷していた人じゃない……」。

フェリペ——「隣人とはそうではなくて、隣人に仕える人のことだと思う」。

(*The Gospel in Solentiname*, Vol 3, p. 98)

グティエレスも同じ結論を出している。隣人は負傷していた人ではない。「隣人とは、負傷していた人に近づいてゆき、その人を自分の隣人としたサマリヤ人であった」(*A Theology of Liberation*, p. 198)。

サマリヤ人はどのようにして隣人となったのか。まず最初に彼は負傷していた人に近づいていく。負傷していた人の状況に入っていくのである。そしてサマリヤ人の関心となったの

は「負傷した」人であったという点が議論をする上で重要かも知れない。私たちの中には、自分たちと同類の人たち、言い替えれば社会によってひどい扱いをされていない人々、だけにしか「近づこう」としない人々がいるかも知れない。ホセ・ミランダはこの問題におけるいくつかの優先事項の重要性を指摘し、極めて具体的であろうとする。彼は言う。物語が関心を持っているのは、「ただ誰でもということではなく、不正義と暴力に苦しんでいる人々であり、憐れみ (compassion) を持つことのできる人からの助けを必要としていた人々であった」(Miranda, *Marx and the Bible*, p. 63)。

「憐れみ」という言葉はミランダの文章において重要であり、問題に向かう姿勢を理解する手助けとなる。そのことは聖書本文においても重要である。「憐れみ」を持つとは、語源的には「共に苦しむ (to suffer with)」ことを意味している。それは並んで苦しむことであり、他者の状況に入りきって、降り掛かってくるすべてのことを分かち合うことを意味している。形式的な宗教的義務を全うすることからでなく、他者に対する配慮と関心から行為が出てくるのである。三二節にある「気の毒に思い」を指すギリシャ語は、「心が動かされたので」と訳すことができる。グティエレスは書いている。しかしこれは全く個人的な関心を意味しているのではない。なぜならば長い釈義的検討を経てミランダが立証しているように、

「憐れみ」は本当には「人間間の公正 (interhuman justice)」を意味しているからである。

グティエレスが強調する第二の点は、負傷した人に近づいてゆくことによって、サマリヤ人は彼を隣人としたということである。隣人であるということは近づいてゆく相手をも隣人にする。この意味においてグティエレスは、「隣人とは、私が進んでいる道の上で発見する人のことではなく、むしろ私が近づいていって積極的に求める人のことである」と主張することができるのである (Gutiérrez, *the Power of the Poor in History*, p. 198)。

隣人となる人を「積極的に求め」なければならぬような特定の場所といったものはない。隣人とは私が遠くから近づいてゆく人のことであり、グティエレスが表現しているように、「あらゆる場所——工場、スラム、農場、鉱山——で探し求めなければならない人」のことである。

隣人の定義を求める抽象的思考が、隣人を求める積極的な具体的行動に変わるのである。これが起こり始める時、私たちの行動に伴って世界は変わるであらう。このような理解が得られると、隣人同士の間に障壁を作るすべてのことが挑戦され、必要な場合には打ち砕かれ、そして再建されることになる。

もう一度イエスと弁護士の話に戻ると、弁護士はそれまでずっと手に汗を握ったままで

あった。イエスは弁護士への問いの妥当性を一掃してしまふような仕方でも物語を語った後、反対に問い返している。「この三人のうち、誰が強盗に襲われた人の隣り人になったと思うか」。かわいそうなのは弁護士の方である。最初にイエスを隣にかけようとした彼が、最後にはイエスの隣にかけられている。イエスの問いに対して、「その人に慈悲深い行ないをした人です」と答える以外にどんな返事ができたであろうか。彼は滅入るような気持ちで、イエスの隣のかけ方が完璧であったことが分かったに違いない。なぜならばイエスは彼に対して、「あなたも行つて同じようにしなさい」と答えているからである。抽象的思考が粉碎されて、具体的行動が始まるのである。

たといあなたに博士号があつたとしても、イエスと論争するのは賢明なことではない。

考察と議論のための課題

1 エルネスト・カルデナルの「厄介な」漁民たちは、私たちのこじんまりした中産階級的世界に何度も足を踏み込んでくる。ラウレアノは、サマリヤ人が宗教者ではなく、職業的宗教者と対比されていることを思い出しながら、私たちの世界についての結論を引き出し

7. イエスのたとえ——抽象性から具体性へ

ている。

「民衆」とは、路上で血を流して死に瀕していた負傷した人のことです。民衆の問題を何とも感じない宗教家たちとは、神殿へ祈りに行っていた二人のことです。革命家の無神論者たちとは、たとえの中の良きサマリヤ人で、良き仲間、良き同志のことです。(The Gospel in Solentiname, Vol. 3, p. 99 若干改変)

ラウレアーノが描いているのは、私たちが多少なりとも知っている世界のことであろうか。

2 イエスの問いと弁護士のは、(a) 少数者集団の権利擁護のための立法化、(b) 貧困者のための社会福祉事業の縮小、(c) 中央アメリカの小さな国々の運命を合衆国が操作していることに関連して、今日隣人であることについて何を示唆しているであろうか。

3 教会生活において、隣人を「積極的に求める」ことは何を意味しているであろうか。ラテン・アメリカの教会が「貧困者のための優先的選択」の決定をした背景にはこの点がある、とい

うグティエレスの主張を考えてみて頂きたい。教会が優先的選択をなすべき貧しい人々はどこにいるのかと彼は問う。確かに教会の中ではない。確かに、町の中でも恵まれた階級の人々が住んでいる地域でもない。貧しい人々はバリオやスラムに住んでいる。彼らは小作人であり、裕福な地主が法外な値段で貸している不毛な土地でかろうじて生きている。彼らは賃金が不当で、労働者を組織しようとする者は誰でも解雇する鉱山で働いている。彼らは刑務所に入れられ、まともな住居や医療を求める権利に関して反体制的な考え方を吹き込んだのは誰か、その名前を明かすようにと拷問されている。このような人々のために「優先的選択」をすることは、安全な抽象的世界に別れを告げて、しかるべき場所へ具体的に足を運ぶことであり、抑圧者に対して被抑圧者が闘いを挑むように組織化を助けることである。

これに類した運動は北アメリカでどのように行なわれているであろうか。

4 想像力を働かせる練習をしてみよう。

まずたとえ話の世界に入っていくことである。エルサレムからエリコへと私たちも下って行く。私たちは強盗に襲われた女性に出会うことになるが、親切にも向こう側を通って行かずに介抱をしてあげる。次の週にも同じ道を行き、同じような犠牲者に出会いますが、同じように介抱をする。

翌月には二回、その道を通って行かなければならなかったが（ちょうどホリデイ・シーズンの前で商売が忙しかった）、その都度、手当の必要な犠牲者がいた。

ここまでのところで私たちにはある思いが浮かんできく。「こんな馬鹿げたことをしていても始まらない。道を通るたびに犠牲者に包帯をしても、何も変わらない。怪我の手当だけでは十分でない。何よりもまず人々が包帯される必要がなくなるようにしなければならぬ」。

そこで次の週、電話による私たちの陳情に答えて、市議会において議員たちが犯罪防止法案を提出することになる。（一）誰でも適切なる武装をして襲撃をかわすことができない限りは、単独での通行を許可しない、（二）潜在的強盗に対する警告として巡回バトカーの台数を倍増する、（三）路上照明改善のための地方債発行が可決されるまでは、夜間通行を、特に五件中四件の強盗事件が発生しているヘアピンカーブにおいて禁止する。

税金は高くなるであろうが、このような措置は道路を少しは安全にし、幹線道路での強盗事件や襲撃を事実上除去するかも知れない。しかし強盗は馬鹿ではなく、捕まる危険がより少なくて生き延びられそうな地域へと活動の場を移すだけのことである。そしてエリコ郊外での押し込み強盗が急激に連続発生するようになるであろう。

もつとラディカルな（問題の根源あるいはルーツに至ると言う意味での「ラディカル」な）処

置が必要である。問題を解決したいならば次のような問いを問わなければならないであろう。そもそもなぜこれほどたくさんの人々が強盗を働くのか。仕事を得られないからなのか（失業上昇率と犯罪上昇率の間には高い相関関係がある）。青少年に良い教育をほとんど与えていないがために、彼らが欲求不満や憂さ晴らしのために旅行者を襲うようになっていくのか。強盗たちは金利があまりにも高いので、返済できない借金を抱えているのか。強盗の何パーセントがマイノリティの人々——雇われるのは一番最後でクビになるのは一番最初、その結果、夜間暴動を起こす時間も十分にある——であるのか。これらの問題を扱うのは誰の仕事なのであるうか。